クラウス・テーヴェライト『男たちの妄想』に寄せて

田　村　和　彦

2005年12月に、ぼくが翻訳したクラウス・テーヴェライト著『男たちの妄想』Ⅰ、Ⅱ巻（法政大学出版局刊）[1]に対して、レッシング・ドイツ連邦共和国翻訳賞が与えられた。この賞は1998年に設けられた、文学あるいは精神科学の分野でのドイツ語から日本語への優れた翻訳書に対して与えられる賞で、2005年度はその８回目であった。ぼく自身、かなりの年月をかけてきた翻訳ではあったが、さほど注目を浴びるとも思っていなかったので、今回の受賞に驚き、かつありがたいことだとも思っている。

ちょうど2005/06年が「日本におけるドイツ年」であったこともあり、この受賞には思わぬ余録がついた。原著者のクラウス・テーヴェライト氏と、初版を出版したシュトレームフェルト社の社主兼編集者ＫＤ ヴォルフ氏をドイツから日本に招いて、東京ドイツ文化センターが主催して、本書とその翻訳をめぐったパネルディスカッションを開くことになったのである。翻訳しておきながら、ぼく自身にとって原著者とは初対面となるためもあって、出会いを前に相当に緊張もした。ただ、東京ドイツ文化センターのはからいで、ディスカッションと授賞式を挟む３日間も

1）第一巻は『男たちの妄想　Ⅰ　女・流れ・身体・歴史』として1999年に、第二巻は『男たちの妄想　Ⅱ　男たちの身体－白色テロルの精神分析のために』として2004年に刊行された。原著名は以下のとおりである。Klaus Theweleit: Männerphantasien, Bd.1: Frauen, Fluten, Körper, Geschichte, Stroemfeld/Roter Stern, Frankfurt am Main 1977, Männerphantasien, Bd.2: Zur Psychoanalyse des Weißen Terrors, Stroemfeld/Roter Stern, Frankfurt am Main 1978

行動をともにでき、彼らを案内して靖国神社にまで足を踏み入れたのは、印象深い経験だった。

ここでは、２月 22 日に東京ドイツ文化センターで行われたディスカッションに際してぼくが行った短い発題「クラウス・テーヴェライト『男たちの妄想』に寄せて」に若干の加筆を加えて掲載する。当初の形態を残すために、あえて語り言葉のまま採録した。

*

もうひとつ、この研究ノートに資料として付け加えているのは、同書の 2000 年のピーパー社版につけられた「あとがき」である。ぼくの短い講演でも触れているとおり、『男たちの妄想』は 1977 / 78 年に初版が刊行された。それから 30 年近くを経た現在に、果たして本書が提起している問題にアクチュアリティーがあるかという問いは、ぼく自身が翻訳をしながらたえず頭の片隅においてきたものでもあった。出版当時二つに分かれていたドイツは統一され、冷戦構造も今は様変わりしている。本書の背景にあった 70 年代末の社会的・政治的な状況のほとんどが過去のものになっている。

ただし、その間に『男たちの妄想』が提起した問題が解決しているわけでは決してない。ファシズム、それも政治的なイデオロギーとしてのファシズムではなく、日常に潜むファシズムが本書のテーマであるが、暴力をはらむこの機構は、70 年代から隔たった現代にも、政治だけではなく、会社、学校、マスメディア、そしてとりわけテーヴェライトが「ファシズムを生む温床」とまでいう家族関係や男女関係のなかに、依然として力をふるっているといわざるをえない。とりわけ、ドイツに比べて「過去の克服」が進んでいない、それどころか逆行する兆しまで見せている日本の現実を顧みると、ファシズムが遠い過去の出来事とは到底いえないことが、ぼくにも実感できる。

本書でデビューしたテーヴェライト氏は、その後、アカデミズムに所属しない独

自のスタンスで、文学、音楽、映画、メディアと政治、コロニアリズムなどに旺盛な執筆活動にとりくんでいる。統一後のドイツの政治･社会状況や、湾岸戦争や9・11についても活発に発言を続けている。[2]『男たちの妄想』の2000年版につけられた「あとがき」でも､｢統一後の」ドイツで1995年から開催された国防軍犯罪展と、ドイツ人の「殲滅的反セミティズム」を論じたダニエル・J・ゴルドハーゲンの著書を引き合いに出して、ドイツでの「過去の克服」の実情に異議を唱えている。きわめて「論争的に」本書のアクチュアリティーを主張した文章だといえよう。訳書ではこのあとがきを掲載することが時間的に難しかったので、この機会に資料として掲載する。

＊＊＊

―「クラウス･テーヴェライト『男たちの妄想』に寄せて」 2005年度レッシング･ドイツ連邦共和国翻訳賞受賞に際しての講演―

『男たちの妄想』は1977年に出された本です。その本が20年以上たって日本に翻訳されるのは「遅きに失した」という思いがないではありません。この本は70年代の知的な沸騰を抱えた、ドイツでいう「68年世代」を代表する本です。68年世代は日本の「団塊の世代」にあたります。既存の秩序を転覆し、「30歳以上の大人を信じるな」と叫んだ学生たちの世代も今は60歳を超えようとしています。この間にたくさんのことが起きました。多くの転換、混乱、そして多くの戦争。ドイツ自体も大きな転換を迎えています。でもあいかわらず、「男たちは撃ち、女たちは流れていきます」（これは、本書が出た当初、『シュピーゲル』誌の編集主幹R.アウグシュタイン氏が書いた書評のキャプションです）。しかし、どこに向かって？

2) たとえば2002年に刊行されたder Knallは、9.11のワールドセンタービル爆破についての報道を検証しながら現代の「現実概念」がこの事件以降、まったく変わってしまったことを論じる評論集である。Klaus Theweleit: der Knall. 11. September, das Verschwinden der Realität und ein Kriegsmodell. Frankfurt a.M. 2002.

ぼくが最初にこの本に出会ったのは 1988 年でした。きっかけはジェンダー・スタディーズとファシズム論の架橋、それから群衆論だったと記憶しています。第一次大戦後に白色テロルを行った義勇軍組織フライコールについて詳しく知ったのもそれが初めてでした。『男たちの妄想』というタイトルも奇妙でしたが、方法的にもこんな本にはお目にかかったことがありませんでした。コミック・ストリップから右派や左派のプロパガンダ、広告、映画のカット、ジミー・ヘンドリクスから政治的プロパガンダまでをいっしょくたにリミックスした、スクラップ・ブックを思わせる型破りの体裁と破天荒な内容にまず驚嘆しました。大変なオリジナリティーを持った本に出会い、それをいま手にしているという実感が最初からありました。少し読めばわかるとおり、精神分析と政治、文学と歴史研究、イメージ分析と時代批評、こういったものをすべてつき混ぜた本書は、正統的な歴史研究から大きく隔たっています。既成のスタイルにも抽象的な理論や体系にもおさまらない自由奔放な書きっぷりにもそれが現れています。しかもこれが学位請求論文であるというのですから。なによりもぼくを驚かせたのは、全体にみなぎる「否定の熱情」でした。すでに 70 年代はすっかり遠のいているものの、この本からはあの時代の知的な沸騰の熱い雰囲気がいまだに伝わってきます。

本書が正面切って扱っているテーマは、言うまでもなくファシズムです。ファシズムがいまだに終わっていない現象であること、地域と民族にかかわらず、あるいは政治体制やイデオロギーにかかわらず姿を変えて現れる現象であることは、社会主義の破綻や壁の崩壊といった 20 世紀末の一連の「転換」以降に起きた戦争や民族紛争を見てもわかるでしょう。ただし、本書の功績は、ファシズムを思い切って、われわれの日常の中にある現実、あるいはわれわれの身体の中に刻みつけられたメカニズムとして抉りだし、分析したことにあります。本書の中でもっともラディカルな問いは、ファシストと非ファシストを分ける境界は本当に存在するのだろうか、という問いです。つまり、本書で問われるのは、すべての人間、特に「おとこ」の

中に潜む暴力性や攻撃性、人を支配しようとする性向の起源であり、その温床となり、それを実現可能にし、正当化する手段がファシズムと呼ばれるのです。ファシズム研究の一環をなすにしても、イデオロギーや政治体制ではなく、もっと一般的な、しかしもっと個人生活の奥深くに潜行する、日常生活の中のファシズムが問題となるのです。ファシズムは本書の中で、歴史的ないしは政治的概念ではなく、より広範かつ根源的な、支配や暴力や破壊を生む心性（メンタリティー）として捉えられています。

そしてこの心性は、とりわけ、女性に対して働きます。というより、男女関係にこそ、男たちの暴力的な心性の基本的なモデルが含まれているとテーヴェライトは明言します。この抑圧の体制は現代の男女、夫婦、親子関係の中にも書きこまれ、それがファシズムを生む温床になっています。その意味でファシズムは戦争状態においてばかりでなく、「平時」にも見受けられるきわめて日常的な現象であり、われわれの社会や家庭がいまだに男権的・家父長的な支配関係によって成り立っている限り、「すべての男はファシストである」という、少々荒っぽい言い方もあたっているのです。ナチズム以前のプロト・ファシストと呼ばれる男性たちをファシストと厳密に区別することができないのと同様に、左翼と右翼も区別できません。大学教授と家庭の暴君も区別できません。

ドイツと同等か、それ以上の軍国主義国家、ファシズム国家としての過去を持つ日本でも、ファシズムは、歴史学や政治学で、ひところほどではないものの戦後から一貫して旺盛な関心が注がれている研究分野です。ただし、いかに反ファシズムを主張するにせよ、大上段に構えて大所高所から理論を説く、そのやり方がむしろファシズム的だ、というテーヴェライト氏の主張はぼくにとってきわめて斬新でした。いや、ファシズム理論だけでなく、あらゆる理論形成やアカデミズムの中にもファシズムが潜んでいるというのですから。ぼく自身が大学とアカデミズムの中に身をおくだけに、方法的前提の中に含まれるこうした支配欲や権勢志向も自分と無

縁とはいえませんでした。というより、思い当たるところがたくさんあったといえます。理論を振り回す「男たち」のひとりである自分を思い知らされたのも、この本を通じてです。

「女・流れ・身体・歴史」と副題をつけられた第 I 巻では、ファシスト男性たちが女性、すなわち自らの妻や母、同僚の妹、や看護婦が表象する《白い女》Weiße Frauen と、プロレタリアートの女性や娼婦、「敵」の女たちが表象する《赤い女》Rote Frauen に対して示す特有の反応、防衛と排除、攻撃と殺害が分析され、それが女性の性愛に向けた男たちの根源的な不信と恐怖に基づくものであることが明らかにされます。このファシズム的心性のモデルである男女関係についても、日本のファシズムは似たような現象を生み出しています。たとえば、第一巻の最初の「七つの結婚」の章では七人の軍人たちと「名も与えられない」妻たちの不自然な結婚生活が描かれますが、これなどは、日本の名だたる将軍たち、たとえば乃木大将と静子夫人の関係を思い浮かべさせずにはおきません。日本の歴史の中にも「殺された」白い女、赤い女たち、そして植民地のポカホンタスたちの死体が累々と横たわっています。（戦時中の翼賛体制のみならず、従軍慰安婦、労働運動のなかにも）。それればかりか白い妻たち、白い母たちは今なお再生産されつづけ、日本の「会社人間」たちの日常や息子たちの受験戦争を支え、銃後の守りについています。このような「平時の」ファシズムを分析するためにも『男たちの妄想』はたくさんのショックとヒントを与えてくれるはずです。

日本の読者にとっての本書の意味を「ドイツ論」という観点から見てみましょう。少し読めばわかるとおり、『男たちの妄想』は、詩人と哲学者、音楽家の国ドイツ、「教養」や「文化」の大国としてのドイツというステレオタイプをきわめて大胆に蹂躙し、挑発しています。高邁な「教養」や「文化」が、自己防衛と自己顕示のための「甲冑」とされ、ファシズムにかかわる過去だけではなく、ドイツ文化全般のグロテスクな面と歪みが抉り出されます。日本の伝統的なドイツ・ファンにとって、憧れに冷水

を浴びせられる思いがするでしょう。「文化よりはアナーキーを」「純血よりは混交を」というメッセージは、先ごろドイツで話題になった主導的文化 Leitkultur を護持する立場からすれば秩序壊乱的で危険なものです。ワイマール共和国が血を垂れ流す巨大な娼婦にたとえられるのをはじめ、国や政治にかかわる事象がことごとく性的な表徴であてこすられるのにも、まじめなドイツ・ファンや伝統的な「教養派」のアカデミズムは苛立つことでしょう。

これはあるいは 2005/6 年の「日本におけるドイツ年」へのあからさまな挑発といえるかもしれません。にもかかわらず、ぼくは本書で示されるドイツ像が、ドイツのみならず、ヨーロッパ文化、さらには人間の文化的活動そのものを、根本的に問い直し、戦争と破壊には向かわない、新しい生産の可能性を示す意味で、きわめて刺激に満ちた、きわめて豊かな創造性を備えている思っています。さらに、本書が実践する、歯に衣を着せぬ率直な議論、論争をいとわぬラジカルな知のあり方、あらゆる権威に対する異議申し立て、開かれた対話の可能性こそ、ぼくたちがドイツからこれまで学んできた最大で最良のものであり、今後なお学ぶべきものだと信じています。

終わりにぼくがこの本を翻訳する中で、体験したことにも触れて起きましょう。

翻訳という行為については、ぼく自身にも個人的な思い入れがあります。この本を訳していたときに、ちょうど自分自身の本を書いていました。トーマス・マンと彼の小説『魔の山』に関する、『男たちの妄想』に比べればきわめてささやかな本ですが[3]、いわゆる「学術書」の枠を破るために、ぼくなりにさまざまなアイデアと戦略を練っていました。なかなかはかどらない自分の本を書き進めながら、ほとんど平行してテーヴェライト氏の本を訳していました。その期間、この本の翻訳はぼくにとって副業というより、ペースメーカーであり、精神衛生にかかわる作業だったような気がします。すくなくともそれは、自己防衛のために「甲冑」を作る仕事

3）　田村和彦『魔法の山に登る――トーマス・マンと身体』関西学院大学出版会　2002 年

ではありませんでした。防塁を築く仕事でもなかった。その間、翻訳という作業を通じて、日本語とドイツ語が交じり合い、ひとつの流れとなって、自分の中に入ってくるような不思議な感覚を何度も味わいました。ぼくにとって翻訳もまた自分をオープンに保ち、さまざまなものを流入させ、多様なものの混在を可能にする行為であり、流れ入ったものから自らの「身体の流れ」を生じさせる作業だったのです。

テーヴェライト氏は『男たちの妄想』の十年後に刊行された別の著書『王たちの書、オルフェウスとエウリディーケ』Buch der Könige, Orpheus und Eurydike（1988）のあとがきで、ふたたび千ページ以上にふくれあがったこの本を書きとおす気にさせたのは、シュトレームフェルト出版社の勧めとともに、同伴者のモニカさんが（どんな含みを持たせたのかはともかく）「書くのよ、クラウス、書くことはあなたの体にいいのよ」と励ましてくれたことだ、と書いています。おそらくモニカさんは本業のテラピストとして、そう言い聞かせたのでしょう。それとよく似た意味で、この翻訳はぼくにとっても自己治療として作用したといえると思います。この翻訳は「体にも、精神にもよかった」のです。

ご清聴ありがとうございました。

＊＊＊

— 翻訳 —

『男たちの妄想』2000年のピーパー社版につけられた「あとがき」

クラウス・テーヴェライト（田村和彦 訳）

最初２巻で刊行された本書は1977年以来、ローター・シュテルン／シュトレームフェルト、ロヴォールト、dtvの三社から出版され、これまでに20万部あまりを売り切った。最初の出版社からは２巻を一冊にまとめた合本も出ているが、このピーパー社の版でも合本されている。ぼくとしては重視している第Ⅱ巻の販売数がいつも第１巻より落ちこむので、合本の形態のほうが気に入っている。時間がなく、実質的内容への興味をそれほど持ちあわせない読者には第四章（邦訳では第Ⅱ巻第２章）の「男たちの身体と白色テロル」をお勧めする。肝心なものはそこに凝縮されている。

＜翻訳＞

1970年代には、政治的には「右派」に属する、いわゆる「ファシスト」を批判し、とっちめることのほうが、いわゆる「左派」の人間、啓蒙や進歩や革命を旗じるしに掲げる人間を批判するより容易だ、という通念が一般的だった。こんな考えをお払い箱にしたのはフェミニズムばかりではない。本書の注意深い読者たちは、ここで手がけられる男たちの身体の「脱構築」が、「左派」の男たち、少なくともその大多数にも適用できることをすぐに見てとった。だから『男たちの妄想』が、アメリカでの翻訳に先立ち、1983年にセルブ・クロアチア語に真っ先に翻訳されたのは偶然ではない。訳者はザグレブのネナド・ポポヴィッチで、出版にあたってグラフィ

チキ・ザボド・フヴァチケ社は 4000 部を印刷するための紙の配給を受けた。旧ユーゴスラヴィアでこの翻訳は早々にはけて品切れとなった。本書でぼくがドイツの兵士的男性について展開した事例は、旧ユーゴではロシア人（ロシア人だけではないが）のスターリニストの分析に応用された。ザグレブとベルグラードを訪問した際ぼくが聞いたところでは、この読み替えは成功したということだ。ただし、重版のための紙の配給は認められなかった。とはいえ、1983 年の時点ではユーゴはきわめて平和な国だった。『男たちの妄想』があの国で経験した変転は、書物というものがいかに役に立たないものであるかを証かす例といえよう。もしどこかのだれかが、書物によって「世の流れ」を幾分かでも変えられるかもしれない、という希望をいだくようなことがあればだが。

セルブ・クロアチア語（ちなみにこの言語はいまやもはや存在しない）以外にも、本書は米語、スウェーデン語、日本語、オランダ語、イタリア語に翻訳された。フランス語訳についてぼくは正直にいってぜんぜん期待していない。というのもフランス人は、幸運なことに、身体、ファシズム、男女の性差ならびに精神分析学の理論に関しては自分たちでよく心得ているからだ。むしろ、ドイツのファシズムともっとも真正な意味で踵を接しているファシズムを生んだ国、スペインとギリシャにおいて本書の翻訳がなされないことをぼくは一番残念に思う。ただしその希望は捨ててはいない。

『男たちの妄想』がもっとも良く、またもっとも正確に読まれたのはアメリカにおいてである。アメリカのいくつかの大学を巡回して朗読会をした際、ぼくは、会場を埋めた聴衆を前に、本書について熟知し、この本について論じたがる人々に向かって話しかけたが、似たようなことはドイツではとんとなかった。

これはひとつには、アメリカの大学では、講演会に行く前に「宿題」が出されるのが普通だからだろうし、もっと大きな原因は、大学を中心とした社会では、ホロコーストを避けてアメリカに逃げたユダヤ人の両親を持つ子供たちが生活し、教鞭をとっているためでもある。戦後ドイツでは大学の内部でも外部でも絶えて見ることはできなくなったが、これらの人々は、一様に関心が高く、よく情報に通じ、礼

儀正しく、大胆でかつ率直で、ドイツ人がようやくナチズムとホロコーストについてまじめに取り組み始めたらしいと聞くと、心底そういう本を読みたいと願っている。その中にアンディ・ラビンバックとジェシカ・ベンジャミンがいて、精神分析医と歴史家の夫婦は本書のアメリカ版の出版のために中心となって働いてくれた。

『男たちの妄想』の使用方法はドイツとアメリカでは大幅に異なる。ドイツでは本書は、フェミニズムが台頭し、男性優位がその鼻柱を折られた時期に、男女両性の直接の対話を促す役割を果たした。舞台となったのは私生活や小規模な生活共同体である。この事情は大学生を中心とする「左派」だけに限らず、こうした問題を受け入れる小規模なグループにおいても変わらない。

大学での受けとめられ方はさまざまだった。ジェンダーに関する議論や、ファシズムにおける文学と心理を扱うゼミナールではこの本は必須文献のひとつにあげられた。ところが歴史学のカーストは、なかなか手ごわいことがわかった。特に第Ⅱ巻の「白色テロルの精神分析」のように、「当事者の心理」にまで論がおよぶものに対してはきわめてかたくなであることがわかった。ドイツの歴史家のうち今日まで、本書の勘所をつかみ、それを自論に取り入れた者は、ほんのわずかな例外を除いていない。

アメリカでは事情が異なる。過去20年ばかりのうちにぼくが出会ったアメリカの歴史家のうちで、少なくともメイル・ファンタジーという本を知らない人は一人もいなかった。たいていはこの本を読んでいたし、何人かは自分の論文の中で引用していた。本書はアメリカのアカデミズムの中では、ファシズム的身体に関する書物として、フェミニズムの議論に投じられた発言として、あるいはその「アカデミズムらしくない」書きぶりと体裁によって定評を得た。逆に、ドイツで見られたような、家庭内での男女間の戦いに関しては、アメリカでは大して注目されなかった。他のことと同様、この点に関してもアメリカはヨーロッパより十年は先を行っていて、ことさら後押しするまでもなかったのである。

一方、70年代に「女性性の理論」に特化して発展したドイツのフェミニズム理論もこの本による刺激を必要とはしていなかった。もともと、それを意図して書か

れたのでもない。特異な書きぶりについていえば、ぼくにとってこの本は「女性に関して」なされたおよそあらゆる記述を、いかなる種類のものであれできる限り包摂しようとする試みであった。その理由は、ヨーロッパのグラマトロジーの主流をなす構造にある。男たちによる、世の中についての世上なされる発言は、古代ギリシャ以来の男性優位社会において常に、またしばしばまず第一に「おんな」に関する発言の形をとり、その側面を強調されてきた。その傍らで女たちは語り手としても聞き手としても、男たちの言説領域から排除されてきたのだ。

これこそ、ヨーロッパ的言説の根底にある「男たちの妄想」のそもそもの核心であって、そのためにこの種の言説は「おんな一般」に関する男たちの発言として羽振りをきかせることができたし、そのことで立派に「暴力」の一環でありえたのである。本書は、もっぱら男たちについて書かれた、女たちと男たちのための書物である。それは、家庭ばかりでなく、スポーツクラブや軍隊のような男性組織、さらに芸術や学問、また戦争に際してばかりでなくいわゆる平時にも機能し続けている「男という組織」の根底にある法則と構造の秘密を明かるみに出す。

したがって、本書の仕上がりと組み立ては、しばしばほめ言葉として使われたように単に「非アカデミズム的」で「かた苦しくない」のではなく、「反－哲学的」とはいわないまでもはっきりと非・哲学的なのである。というのも、数学やスコラ神学を除けば、男性的な概念のもっている骨組みがこれほど堅固かつ排他的に自己主張しているところは、古典古代からアドルノに至るまでのさまざまな哲学の学派をおいてないからである。これらの哲学は独自の専門用語を振り回すことひとつをとっても、（もちろんどの流派もあまたのジャーゴンを持ちあわせているのだが）少なくともきわめて尊大である。『男たちの妄想』が目指したのはなによりも、こうした哲学とは別のスタイルである。[4)]

4）（原注）：アムステルダムで行われたディスカッションで、ある親切な大学関係者が、自分はこの本を「フランクフルト学派の克服の書」として読んだといってくれた。ぼくが目指したスタイルは聞き届けられたのだろう。

〈「殲滅的反セミティズム」－ 拷問者の笑い〉

本書を刊行してから後、兵士的男性による暴力の理論を増補した発言を、ぼくは主にエッセイ集『外国と呼ばれる国』[5] に収録した「男性の誕生様態　制度的身体としての男性身体」そのほかの文章で展開している。そこでは男性が殺害という行為を通してどう自己生殖を行うかを、拷問を例にしてより明確にしようとした。ここでいう拷問とは秘密裏に行われるものではなく、男性の身体を国家的な機構の一部へと作り変えることを目的とする「文化的手続き」として公けに行われるものだ。それは、儀礼にのっとって執行され、共同で行われることで侵犯の犯罪性を許容する行為である。兵士的男性はエクスタシーを思わせる哄笑に包まれながらこの儀式を挙行する。

こうした特徴づけを行えば、ダニエル・ヨナ・ゴルドハーゲンがその著書『ヒットラーの忠実な執行者たち』[6] で描き出した、第二次世界大戦中にドイツ軍警察部隊がいわゆる「東進作戦」で行った、ユダヤ人やロシア人に対する大量殺戮の多くがこの儀式にあたることがわかるだろう。もちろんゴルドハーゲンは同書のなかで「ごく普通のドイツ男性たち」の犯罪を列挙し、ドイツ人の「殲滅的反セミティズム」という理論を多くの資料で裏付けるにとどまっている。出されている診断そのものは説得的だし、証拠もよくそろえられている。『男たちの妄想』でこの問題に関して述べたことは、ゴルドハーゲンの出した結論と同じ方向を向いている。ぼくとしては、もしゴルドハーゲンの本で予告されていたように抹殺の「実行者」とその「動機」の探求がさらに進んでいたならばと、もっと喜んでこの本を受け入れただろう。

ゴルドハーゲンは自著を「実行者の心理に迫る探求」の一環に位置づけようとしているが、実際にはそれにはほとんど貢献するところがない。彼は実行者の心理について三つのささやかな答えを出すにとどまっている。第一に、彼が調査した警察部隊の男たちは、強制されたのではなく、自発的に殺戮行為に加わったこと。第二

5）Klaus Theweleit: *Das Land, das Ausland heißt*. München 1995

6）Daniel Jonah Goldhagen: *Hitler's Willing Executioners: Ordinary Germans and the Holocaust*. New York: Alfred A. Knopf, 1996

に自発的なだけではなく、快楽からそれをしたこと。第三に、ともかく彼らは決断を下したのだから、いかなる意味においても独断で殺戮を実行した者として責任があること。犯罪的行為を強いられながら、「潔白」で、この事例だけを例外としてそのほかは「無害な」兵士的タイプの人間など存在しないのである。

「人々は彼らに、捕虜の生死を独断で決定する権利を認めた。そうはいっても第 65 警察部隊に所属する兵士たちにとっては、すべてのユダヤ人とソヴィエトの人民委員の抹殺はすでに自明の理であった。」（ゴルドハーゲン 233 ページ）

まったく正しいけれども、残念ながらゴルドハーゲンはこの種の説明を何度も繰り返すだけに終わっている。この説明は分析的になることはないし、抹殺の実行者に対する半ば法律的に、半ば道徳的－実存主義的に根拠づけられた非難を表明する以上のものにはなっていない。（ただし、ゴルドハーゲンが取りあげて紹介している暴行シーンを彼自身が「ポルノでも見るように」楽しんでいる、といういいがかりはとんでもないものだ。詳細をつまびらかにしない限りは暴力についても語ることなどできない。）

しかし、ゴルドハーゲンは自分が描き出そうとしている事件の戦慄を、概念としても情動としてもとらえるに足る言葉を持ちあわせていない。彼はナチスの殺人者の心的組成を前にして途方に暮れるばかりである。

そのいい例が「ドイツ人はユダヤ人をいわば自閉症的なやり方で扱った」（472 ページ）というたぐいの言い回しである。この言葉は何も説明していないばかりか、臨床上の自閉症患者を一介の暴行犯と同列におくことで、彼らを貶めている。ゴルドハーゲンがカプランの『苦悶の書』[7] を引いて、ドイツ人たちの理解困難な行動を説明しようとする場合にもさほど事情は変わらない。この引用によれば、迫害され絶望に駆られたカプランにとってナチスすなわちドイツ人は「病的に退廃した」人

7）Chaim A. Kaplan: *Buch der Agonie. Das Warschauer Tagebuch des Chaim A. Kaplan.*
邦訳：ハイム・A・カプラン『ワルシャワ・ゲットー日記―ユダヤ人教師の記録』〈上〉〈下〉風行社（1939 年のナチスによるワルシャワ占領とそれ以降のワルシャワ・ゲットーでの日常を描いたユダヤ人の日記。カプランは 1942 年もしくは 43 年にトレブリンカの強制収容所で死亡した。）

間の集団であり、「彼らはその本性からして病的なサディズムに冒され、その病いは彼らの体のあらゆる微細な繊維にまでしみわたっている」（465ページ）というのだ。

この「ドイツ人の病い」を、「自閉症」だとか「サディズム」とか「その本性からして」とか「退廃」とする以外の言葉を見つけることが、およそ分析をこととする学者に与えられた責務なのだ。[8)]

ゴルドハーゲンの著書への批判はこの線で進められるべきだろう。特に批判されるべきは、彼が自著に先行する「実行者」に関する研究を、クロード・ランズマン監督の映画『ショアー』[9)]を含めてほとんどすべて無視していることだ。こんな具合にゴルドハーゲンはせっかくの所見をたいていの場合自分から弱めてしまっている。というのも「ドイツ人の殲滅的反セミティズム」という言い回し自体は、世間で批判を受けたほど「誇張した」ものではないからだ。歴史家カーストの構成員を除けば、ぼくの知っているまっとうな神経のドイツ人は、このことを疑うことなく40年来生きてきた。ただ、ドイツの中にいるドイツ人として壁に向かって語り続けてきただけである。

ドイツにおける反セミティズムの特別な構造を示すのは、『男たちの妄想』の第Ⅱ巻の最初に掲げられた三枚の絵である。どれも1920年代のものだが、どの絵でもユダヤ人が三つの「危難にさらされた集塊」の支配者として描かれている。まずロスチャイルドの姿をして金銭の世界を牛耳り、性的な卑劣漢としてブロンドのドイツ女性の身体を我がものにして蝕み、ボルシェヴィストとして健康な民族の体から血を吸い上げて、されこうべの山の上で血を浴びている。大量に溜めこんだ金貨の山の中を泳ぎまわるダーゴバート・ダックそのままに。

8)　（原注）：しかも、ゴルドハーゲンの英語のオリジナルにあたってみると、「退廃」なる用語を使ったことについては彼自身にもカプランにも責を負わせられないことがわかる。これは翻訳者が勝手に付け加えた言葉である。原著には pathologically ill とあるだけだ。もちろんこの言葉も殺戮の実行者について何も説明しているわけではないが、少なくともナチスがユダヤ人という人種に貼った「退廃」というレッテルを逆にドイツ人にあてはめているわけではない。これをしたのはドイツ語への翻訳者で、編集者はだれも文句をいわなかったらしい。

9)　クロード・ランズマン監督　『ショアー』1985年

こうして「ユダヤ人」はドイツ人、アーリア人から金と血と人種の純潔を奪い取るとされた。ユダヤ人こそ、数々の「良い」エネルギー、すなわち労働力、購買力、産出力を腐敗壊乱する原理の黒幕に他ならない。彼らはインフレと高利子によって金銭と労働力を解体し、道徳的腐敗によって出産力を骨抜きにし、アーリア人の汚されない肉体を混血によって毒する。ユダヤ人自らも吸血と死体愛によって生き永らえている、というのだ。

『男たちの妄想』は、ドイツ人の大半にこれらの図像が示す「真実」がいかに骨身に沁んでいるかを、またその原因は何かを考察しようとした。ユダヤ人たちが「死に値する」ことはドイツ人にとってもっとも深い確信であったばかりではない。それはドイツ人のもっとも内部にしみこんだドイツ的感情であり、身体感覚であった。ユダヤ的なものがいかに世界に害悪をもたらすかについてのドイツ人の確信は限度を知らなかった。このことをゴルドハーゲンは最大限に強調したのだ。ただしその理由がなんであったかについては、彼の著書ではわからないままだ。一般のドイツ人がユダヤ人の腐敗力に対する防衛戦を戦うについていかなる信念を抱いていたかがわからなければ、ナチスという怪物について理解したことにはならない。ドイツ人は第一次大戦の終了以来、その価値をさっぱり認められなくなってしまったヨーロッパ的・西洋的な意味での人類の救済者として、正当な権利を持つ者として行動したのである。

〈「生まれきらなかった男たち」〉

ぼくはこの言葉を、兵士的男性の断片化された身体の情動的な非現実性を示そうとして第Ⅱ巻第２章で導入したのだが、この用語は多くの読者の批判にあった。もっともなことだろう。「生まれきらない」という言葉は、あたかも断片化する危険に脅かされた状態の「克服」を経て、寛解して「生まれきる」状態が存在するかのような、あるいは人間には「本性そのままに」完成された状態があるかのような印象を与える。

「生まれきった存在」がいかなる状態を指すのかは実際にはだれも思い描けない

し、その条件をあげることさえ不可能だろう。ぼくたちは母親の胎内からこの世に生まれた限り、最初はみんな「生まれきって」いない。そして、生というものが「新たな誕生」を意味するような転回点を含み、それを排除しない限りは、ぼくたちはある程度までこの状態にとどまり続ける。それにまた、ぼくたちはたいていは第三者の助けを借りてこの作業にかかわり、前とは違う人間として新たに生まれ変わることができる。

ぼくは「生まれきらなかった男たち」という言葉によって、生後間もない小児に見られるのと同じ、ある種の「障害」の段階にとどまり続けている人々を指した。彼らはその身体的な発育の過程で初期の断片化から抜け出して成長することができず、なにかに呑みこまれるという強度の不安に生涯にわたって固着した人々である。彼らはまた、自我形成に際して「快楽原則」に替わって「苦痛原則」というべきものを代用し、必ずしも取り返しのつかないものではないのだが、彼らの発達が示すいくつかの特徴のために、「現実処理」を行うにあたって、労働や愛や誕生や認識といった、生にかかわる作業を暴力と切り離すことができないように宿命づけられた人々である。

それらがどんな特色を持つかについては第二巻第2章で詳しく論じている。この特色が兵士たちの身体において一連の行動へと収斂し、それが政治的な概念では「ファシズム」と呼ばれて20世紀のヨーロッパ史を広範囲にわたって特徴づけたのである。『男たちの妄想』は、現実を生み出す「ファシズム的な」様態をテーマとした書物である。「ファシズム」が引用符で囲われているのは、本書で記述された現実生産の方法が政治的なファシズムを信奉する陣営に限らず出現するものだからである。だからぼくはファシストを指すのにもっぱら「兵士的男性」という概念を使った。この男性は身体への介入、とくにしごきによって製造される。ここでいう「しごき」は、その機能からして一種の言述による実践ととらえることができる。つまり「兵士的男性」は作り上げられるのであり、彼らは社会に生きる他の人々とまったく同じように自分を作り上げる。より平和的な人間関係のもとであれば、彼らは自分たちのセクシャリティーを選択し、組み立て、作り変えることもできるはずで

ある。その意味で、「生まれきらなかった男たち」という言葉には、完成された「人間の本性」を前提とする固定した観念は含まれていない。むしろ明らかにすべきは、第一次大戦後のドイツにおいて、なぜ、またいかにして「デモクラシー」という政治体制が彼ら兵士的男性の身体を死と腐敗によって情動的に脅かすにいたったかである。さらに明らかにすべきは、政治的なものにおいてすくなくとも第一番に決定的な意味を担うのは何らかの「イデオロギー」ではなく、異なる状態に置かれたさまざまな身体同士の闘争だということだ。そこから生じたものがほとんど押しとどめがたい力をもって政治的もしくは言説による表現を求めるのである。

〈引用符つきの「同性愛」〉

第Ⅱ巻第２章におかれた「同性愛と白色テロル」の節を、今のぼくなら別な風に書くだろう。70 年代の終わりから、ゲイ理論とクイア理論において、世間の受け止め方が大きく変化したことと関連して、知識や書法においても著しい進歩があった。軍隊と同性愛についても同様である。たとえば、ジョージ・Ｌ・モッセの『ナショナリズムとセクシャリティー』[10] の「男らしさと同性愛」の章や、ジュディス・バトラーの一連の著書[11] を挙げればいいだろう。ぼくの本で同性愛をわざわざ引用符つきでタイトルに掲げたのには理由があった。文中でも詳しく論じているが、それはぼくが同性愛を特別な性的挙動のひとつとして取りあげたくなかったためである。そうしようにもぼくの側にはそのための前提条件がなかった。ぼくが論じたかったのは、男性的組織や青年運動やナチス親衛隊の内部で行われるある種の悪ふざけについてだった。ここでは、侵犯的行動と、市民的生活からの逸脱と、グループ内部でのある種のアウトローぶりを確認するために、わざわざ「同性愛」を思わせる所行が利用された。

10）　Georg L. Mosse: *Nationalism and Sexuality.*　邦訳：G.L. モッセ『ナショナリズムとセクシャリティー』柏書房

11）　Judith Butler: *Gender Trouble. Feminism and the Subversion of Identity.*（邦訳：『ジェンダー・トラブル』青土社）; ほかに *Subjects of Desire; The Psychic Life of Power. Theories in Subjection* など

ぼくはこうした示威的な行動を本来の性的なものとは名づけない。異性愛においても、女性に対する男性の攻撃的な挙動があるが、たとえそこにペニスが登場しても、純然たる武器としての用途を持つだけだから、この挙動を「性的」とはいわない。兵士的男性においても、ある特定の状況に置かれた場合、普通なら性的なものとされるような行動が規則的に暴力的行動に変化する例が見られる。たとえば「出産行為」が殺害に逆転し、「労働」が破壊に転化する場合もある。ここでは、暴行の対象である女性を前にしてある種の男性の身体が勃起することがなぜ可能か、という問いに答えることが必要があろう。もともとの性的身体はこのような「任務」を拒絶するはずだからである。もうひとつぼくが目指したのは、ファシズムにおける暴力の行使は当事者の「同性愛的素因」によるものだという、過去の世代に属する伝統的な精神分析学者たちがしきりに持ち出す仮定（というより誹謗）を修正することだった。ぼくがとりあげたテキストから判断して、はっきりいえるのは、ここでは「同性愛者」が暴力的な妄想を垂れ流しにしているのでは断じてなく、全般的に見て性的構造を暴力構造の下に埋もれさせてしまっている人々が、社会的には爪弾きにされている同性愛的な行動を名目に、自分たちの集団の超法規性を誇示しようとしたことである。この二点に関してはいまなお間違っているとは思わないので、ぼくはこの節を書き換えなかった。これ以外の部分も以前どおりの形で出版されている。

〈戦争責任論争と国防軍展〉

略奪と虐待と殺戮をほしいままにした兵士たちが、権勢によって特別に保護され、処罰を受けないことを保障された場所で勝手気ままに行動したというのが正しいとすれば、彼らの罪の意識とか責任能力を「道徳」や法律学に照らし合わせて問う議論は成立しない。このことは、1920年に義勇軍がルール地方の労働者たちに対して行った殺戮であれ、1942年にドイツ保安隊が白ロシアでユダヤ人やボルシェヴィストたちに行った大量虐殺であれ、およそすべての「実行犯調査」に該当する。どちらの場合にも「法にのっとって」行動した兵士たちは、罪悪の意識から情動的に

解放されている。すなわち、彼らは罪悪を感じずに済み、そのために罪悪は保存されることも蓄積されることもない。それに対して、殺害に際しての快楽に向けられた問いは別の方向を示す。快楽は暴力行為に付随しているだけではない。快楽が加わることで暴力に特別な色彩が加わり、暴力の構造が変わるのである。(「構造」というのはあまりに突き放した言い方だろうか。)問題なのは法律問題としての「責任」などではなく、殺害に際して犯罪者が味わう快楽なのである。

現時点で『男たちの妄想』を読むことと当然ながら直接にかかわってくる三つの大きな論争 —— 歴史家論争、ゴルドハーゲン論争、それにハンブルク社会研究所が主催した「国防軍の犯罪」展[12] をめぐる論争は、残念ながら全般的にはこうした意見や認識を取りこむことなしに終息してしまった。成果として見ても、兵士的・男性的な暴力についての理解が格別に進んだわけでもなく、ゴルドハーゲン論争や国防軍犯罪展論争では初めて陽の目を見る膨大な量の資料が提供されたにもかかわらず、「暴力の理論」の解明という課題に関してもほとんどといっていいほど前進が見られなかった。ゴルドハーゲン論争で主導権を握ったのは新聞の部数拡大競争だった。ジャーナリストたちは寛大な扱いを受け、あれほどうまく論争を仕切ることができた。それというのもこの論争に参加した大学の歴史学教授のお歴々はジャーナリズムに「理論の場」をほぼ全面的に明け渡してしまったからである。

この惨憺たる状況は次のようにも言い換えられよう。ここドイツの歴史専門家たちは、ほとんど唯一の例外もなく、個人の成り立ちについての基本的テキストを知らず、小児の身体の精神分析におけるフロイトの基礎理論はおろかその理論的発展も知らず、いわゆる「主体」なるものが、書類庫や牢獄やしごきや建築や労働環境などのさまざまな外力の介入をこうむって構成されるという、フーコーの知識や認

12)　国防軍犯罪展はハンブルクの社会研究所の主催で最初は 1995 年から 99 年までドイツとオーストリアの 33 都市を巡回して展示が行われた。「殲滅戦争　国防軍の犯罪 1941 － 44」というタイトルで開催されたこの巡回展は、ショッキングな写真史料の展示方法と信憑性をめぐり、ドイツ国内だけではなく東欧圏を巻きこんだ激しい論争の材料となり、テーヴェライトの文中にあるように 1999 年 11 月にはいったん中止された。専門家による委員会の調査を経て、２年後に新しいコンセプトで「国防軍の犯罪　殲滅戦争の諸次元」という表題のもとに再開され、2004 年までヨーロッパ各地を巡回した。

識にも通じていない。こんなことはフーコーの中でもいちばん単純な『監視と懲罰』にこの上なく明瞭に書かれているのに。彼らは、ケイト・ミレットの『残酷の政治』[13]で描かれている犯罪者像に目を向けることも、利用することもない。さらに彼らは本書に20年も前から書かれている「兵士的男性」の身体の成り立ちについても知らんぷりを決めこんでいる。彼らは「実行犯調査」でこれまでに重要な論点として示されたジェンダー研究やコロニアリズム研究、ナチス関係者の自伝についても目をふさいだままだ。（これらの研究についてはジュディス・バトラー、インガ・クレンディネン、ティルマン・モーザーを多くの研究者の代表として挙げておこう。[14]

にもかかわらず、ハンブルクの「戦争犯罪展」企画者が展示に「国防軍の犯罪」というタイトルをつけ、東方におけるドイツ軍による殲滅作戦の意図を明らかにしたのは正しいことだった。ゴルドハーゲンの著書の「ドイツ人の殲滅的反セミティズム」という副題についても同じことがいえる。あつかう素材からしても、方向付けからしても、国防軍犯罪展とゴルドハーゲンの著書がもたらした反響はドイツにおけるホロコースト理解に突破口を開いたといえる。今となってはよほど頑迷固陋な人でなければ「国防軍は清廉潔白だった」などと言いつのることはできない。ドイツが国の隅々まで犯罪に加担していたという意識は各家庭にまで浸透し、家庭はこれらの犯罪を記憶する原点となった。

こうして、戦争に参加した世代の孫たちやひ孫たちが、彼らの祖父や曽祖父がいまだに存命中であれば、彼らに東方作戦にどう参加したかを聞くことができるまで、50年を要したことになる。当事者の多くが、写真に写っているのがだれかわかり、孫たちが祖父から聞き知った地名は、「国防軍犯罪展」でふたたび耳にするときにはまったく違った響きを持つにいたった。一方、ゴルドハーゲンが提出した「ごく

13） Kate Millett: *The Politics of Cruelty: An Essay on the Literature of Political Imprisonment*. 1994

14） Judith Butler については前出。 Inga Clendinnen はオーストラリア生まれの歴史学者、人類学者。ラテン・アメリカの研究者として著名。主著に *Ambivalent Conquests: Maya and Spaniard in Yucatan, 1517-1570: Aztecs: An Interpretation; Reading the Holocaust* など Tilman Moser はドイツの精神分析医、文筆家。*Gottesvergiftung*. 1976 ほか

普通の男たち」と彼らの「自発的な」快楽殺人を示す証拠書類には、ほかの波及効果もあった。虐殺が事実であり、意志に基づく大量殺戮であったことはもはや疑いようがない。しかもそれはユダヤ人の殺戮にとどまるのではなく、ソヴィエトの人民の殺戮も含むのだ。

戦争当時、ベルリンのベントラー通りにあった国防軍参謀本部ではロシアで2000 万人が餓死するだろうという予測を立てていた。モスクワ侵攻が予定通りのスピードで進めば、モスクワ付近の前線にまで進駐していた国防軍兵士に対する食糧補給は到底続けることが出来なかったろう。国防軍は文字どおりロシアを骨の髄まで食いつくし、その結果、上に上げた餓死者 2000 万という数字は現実のものとなったはずだ。これは冗談ではなく、クリスチャン・ゲルラッハの２冊の著書[15] が明らかにしているとおりである。[16]

〈君の敵　映像〉

「国防軍犯罪展」は目下のところ閉店状態だ。ぼくが思うに、中止する必要はなかった。そうせざるを得なかったのは、おそらく展示物の理論的な検討が不足していたからだろう。この欠陥は第二次大戦下の「ドイツ人」一般の行動をめぐる議論には一貫して見られるものだ。それは展示された写真を例にとると詳細に見ることができる。国防軍犯罪展の展示物の信憑性をめぐる論争は、間違ったキャプションをつ

15）Christian Gerlach: *Krieg Ernährung Völkermord. Forschungen zur deutschen Vernichtungspolitik im Zweiten Weltkrieg*, Hamburg 1998；*Kalkulierte Morde. Die deutsche Wirtschafts- und Vernichtungspolitik in Weißrußland 1941-1944* 1999

16）（原注）現在、第二次大戦後では始めて、ドイツの若い歴史学者のグループがラトヴィア、エストニア、リトアニア、ウクライナ、白ロシア、ロシアおよびかつての「占領区」ポーランドの文書館で研究を進めている。これはベルリンの壁の崩壊と鉄のカーテンの開放によって可能になったことだ。身の毛もよだつ資料を扱いながら、冷静かつ正確で、攻撃的ではなく学問に立脚した多くの本が目下書かれ、すでに出版されたものもある。ただし、彼ら若い歴史家たちは「快楽」が長期にわたる拡大された殲滅戦において「ごく普通の男たち」の身体にいかに染み入ったかについて答えを出す資格はないと考えている。その結果、見るも平板な心理主義に身をゆだねてしまうことになるのだが。こんな弊害を防ぐには別の文書館を覗いてみるしかない。いったい、人間の情動に関するまともな理論も持たずに歴史家になることなどできるのだろうか。

けられた何枚かの写真を発端に火がついた。そもそも写真なり画像なりは歴史的な史料としては常に「論争をはらむ」ものである。撮影されたものを見る限りは、写真の持つドキュメントとしての内容は疑わしいものであることはいうまでもない。落とし穴はたくさんある。写真のタイトルやキャプションを勝手気ままにつけるのが新聞や文書館の慣例である。次に、文書館では写真の公開にあたって、トリミングやリタッチや視点の変更を恣意的にほどこす場合がある。おまけに写真は撮影者の名前とともに保存されてはいないので、記録として正確に跡づけることはできない。文書館には撮影者のリストすらそろえられていない。こういった次第で場所や時間の特定は比較的不正確だ。こんな議論は今回の論争の中でも盛んにされた。ところが肝心のことにはだれも気づかなかった。つまり、一枚の写真が持つドキュメントとしての性格は、そこに写ったものだけで決定されるわけではないのだ。これは写真の根本にかかわる。

一枚一枚の写真はそこに写ったものとはまったく別なものを記録してもいる。すなわち、撮影者の視線である。少し熟達した映画ファンならだれでもこのことを知っていて、映像の「質」が記録的なものか、情感的なものか、虚構的か美的かは、監督がどう映像を配置したかによって判断される。カットや、映像の深度や、影のでき方、色彩などが判断材料になる。映像を見る人は、なににもまして、映像には直接あらわれないもの、つまり監督の視線を見るのである。（そもそもそれが見えれば、であるが。）

それとは逆に、休暇で撮った写真の多くには、文字通りなにも写っていない。見えるのはシャッターを切った人間の凡庸さ、もしくは不器用さだけだ。この種の写真を見れば、カメラマンが撮影されたものに向けた視線を持ちあわせていないことがわかる。あるいは、ゴダールの言葉を使えば、彼らは五千回も同じ写真を撮り続けている。そして写真が示すのは彼らが被写体に向けてはいるが、なにも見ていない視線の千篇一律のありようだ。

では、国防軍展の写真が見せるのはなにか。まず第一には、兵士たちが出来事に向けた視線だ。もし写真のドキュメントとしての性格を尊重しようとするならば、

この視線こそ記述されなければならない。この視線はどんな性状のものなのか。それはファインダーに接したカメラマンの目と、彼が操るピントからなる。そして第二には彼が写真を撮る状況からなる。第三には、ショットの際に彼が目にしたものから、第四にはそこで彼が「考えた」ことからなる。こうした一連の要素の何がしかが写真から見てとりうるのである。

まず、目についていえば、1941 年以降数年間、ロシア戦線における兵士たちの目はカメラを自由に使いこなしていた。ロシアに進駐したドイツ兵士のうち驚くほど多くが写真機を携行していた。それは以前の戦争とは異なることで、多くの観点からしても驚くべきことだった。たとえば撮影にはフィルムが必要だったはずだ。ロシアの商店でそれを買うことは出来なかったし、一般人から奪うにもそもそも品がない。だからフィルムは補給物資としてはるか後方の銃後から送り届けられねばならず、送り届けられたものが正式に分配されたのである。あるいは一時帰休した兵士たちが故郷から持ってくる場合もあったかもしれない。ともかく撮影用フィルムは「軍需用品」として製造され、戦争の遂行に必要なものとされた。そして兵士たちはそう軽くはなかったはずの軍装に加えて写真機とフィルムをいたるところに携行したのである。彼らがすすんでそうしたことは、写真が示すとおりだ。

第二に目を向けたいのは、これらの写真が撮られた状況である。休暇ではなく、戦争であった。展示された写真はすべて、なんらかの軍事的行動とのつながりで撮られたものである。たとえ命令を下す上官が近辺に写っていないとしても、写真による「ショット」はどれもが軍規の秩序の中、つまり命令と服従を原理とする宇宙の中で放たれたものである。

軍事関係にはまったく疎い人でも、軍事施設や軍事作戦に関する重大事項のひとつに「撮影厳禁」が含まれることを知っているだろう。今でも送受信アンテナのような、さして重要とも思われない連邦軍施設に近づくと、回りを取り囲む金網の柵にこの注意書きがぶら下がっているのが見えるはずだ。

メディア史では一般に、戦場での写真撮影がいわば自由放任にされるのはヴェトナム戦争からだとされる。この定説は修正されるべきだろう。ロシア遠征に徴募さ

れたドイツ兵たちこそ、写真撮影を許された明らかに最初の例だったからだ。見せるものがあれば彼らはまず何よりも写真を見せた。それは許されていたのだ。ロシア戦線で兵士たちは、普通なら厳格に適応される軍事機密の守秘義務があったにもかかわらず、カメラの前の視界を横切る、劣等とされた東方の生活のすべてにレンズを向けた。

さて、第三に注意したいのは、兵士たちがカメラでなにを写しとったかである。写されたのは、ツーリストがカメラを向けるような絵葉書風の風景やひなびた農家の庭でも、異国の民族の暮らしぶりでもなかった。兵士たちは主として殺害の現場をカメラにおさめた。つまり、日常では撮影が決して許されないものを撮影したのである。同僚が向けるカメラのフレームに自分のしぐさがうまく入るようにポーズをとっている場合もある。同僚というより、同じ権力を持つ男同士というべきだろう。国防軍犯罪展に展示された写真の多くは疑いもなくこのことを示している。写真は、殺害に直接手を下した者も、それを撮影した者も、公的な認可を受けて行動し、さらに普通ならば禁止されていたものをことさら選んで記録にとどめたことを示している。

そうすることで兵士たちは、ぼくがあらゆる男性組織の中核にある機構として描き出した状況のなかで行動したといえる。すなわち彼らは公的な権威によって認可され、あるいは期待までされているという理由だけで、犯罪とはなりえない侵犯的行為に、なに恥じることなく加担したのである。殺人は許可されたものであったために、殺人として認知されることもなく、現場の写真は休暇先の写真のように家に持ち帰られ、あるいは家族の写真と一緒に財布の中にしまいこまれた。なによりもこの写真は、犯罪を許されるという天国のような自由を兵士が味わったことの証拠となるもので、それは地上から害虫を駆除する仕事でもあったからだ。処罰など思いもよらない、俺たちは勝つはずだったのだから。

ロシア、ポーランド、あるいはバルカン地域でシャッターを切った兵士たちの写真は、こうした意識とこうした視線の存在をなによりもはっきりと告げている。それも、罪の意識に皆目曇らされない明瞭さで。戦後西ドイツでは国防軍の活動を擁

護するために、東方作戦において兵士たちには何の責任もないという主張が性懲りもなく繰り返されたが、これらの写真はすでにその主張を先取りしている。だからこそ国防軍犯罪展に反対する人々はこれらの写真にショックを受けたのだ。彼らの大半が展示から足を遠のけたのは、展示物が明白な証拠として示すこの視線から、当時も今も逃れようがないからである。

もっとも、国防軍展について報じた記事でこの証拠の明示性に触れている例はごくわずかしかない。コルネリア・ブリンクは例外のひとつだ。

「写真の示す『物的現実性』をいかに再構成するかに限定された法律学的な立証と同じ方法をとる限り、歴史学の手からは、歴史的な出来事が持つ重要な側面は抜け落ちざるを得ないのは当然である。たとえば写真の撮影者が不明な場合もあるが、それは写真そのものが撮られた状況によるものだ。兵士たちが写真に文字を書き入れなかったとしても、書かなかったことそのものがひとつの証言になりうる。それに加えて、多くの写真の特殊性は、写された出来事だけではなく、写真があった場所 —— 財布の中や家族のアルバムの中で、妻や子供たちの写真の間にあった場合もある —— にも示されている。」（バーデン新聞　1999 年 10 月 29 日付）

確かにそうだったのだ。1999 年 11 月 9 日付の南ドイツ新聞でフリッツ・ゲットラーは J.P. レームツマ[17] がこの展示を早期に打ち切ったことを批判して、次のように書いている。

「国防軍犯罪展においては、知ることそのものにも重点が置かれていた。歴史がどう探査され、体験されるか、というプロセスである。それは見ること、考えること、感じとることをすべて含む省察のプロセスである。（中略）中止という猶予期間を置くことで、かつての責任者たちはふたたび過去のレールの上に戻るだろう。伝統的な学問の庇護下に入ればまずは安泰というわけだ。展示を打ち切る決定をするにあたっては、疲労が理由にあったかもしれない。諦めが。しかしこの処置は、本来意図していたことに対する裏切りでしかないのではないだろうか。」

17）　ジャン・フィリップ・レームツマはハンブルク社会研究所（1984 年設立）の出資者・設立者であり、研究所はその名前をとってレームツマ研究所とも呼ばれる。

ゲットラーの論説のタイトルは「停止した図像」である。一方で国防軍犯罪展は、写真につけられたキャプションのあるなしにはまったくかかわらず、写真を撮影した兵士たちが被写体に向けた視線があることを明らかにした。したがって、ここに展示された写真の「真実内容」をめぐる論争は、ドイツの映画批評の現状をめぐる議論につながり、ここドイツで視覚の文明化に関する技術がいまだにいかに低レベルにとどまっているかを示すことにもなる。この展示の「新たな基本方針」なるものをめぐるその後の報道を追う限り、ゲットラーの危惧は当たっているといわざるをえない。該当の写真は撤去されるそうである。あの写真は単に新しい史料というだけでなく、国防軍犯罪展を決定付けるものであったにもかかわらず、である。文書のレベルでは、国防軍の犯罪を証拠立てる資料は、ファシズムに関する知識水準として、かねてから広く知られていた。しかしそれは、殺害を行いながらカメラを向けた兵士たちの視線をさらしだしたわけではない。レームツマは、この展覧会の中でむきだしになったこの視線に気づかなかったものと見える。写真のなんたるかもわからない批判者の前に屈してしまったのはなんとも残念なことだ。

〈イメージ〉

『男たちの妄想』が、テキストに中にファシズムのイメージを（ファシズムだけに限らないが）縦横にモンタージュしようとしたドイツ最初の本であったのは確かなことだ。これらの図版は該当するテキストを視覚的に説明するためだけではなく、その中にさまざまな視線をためこんだイメージとして挿入されている。そこに蓄積されたのは、歴史的な視線、現代から見た視線、画家やカメラマンの視線、ポスターの作者やプロパガンダ作成者の、映画の作り手の視線、ナチスと非ナチスの視線である。それによってこれらのイメージはそれ自体として独自のテキストを織り上げている。

まさにこのイメージという点に関して、ゴルドハーゲンから学ぶことができたはずだ。ここで彼はアメリカ人特有の冴えた視覚を示している。

「ドイツ人が民族殺戮に対して示す率直な態度は、実際に手を下した者たちが彼

らの『歴史的』行為といかに見事に折り合いをつけているかをよく示している。彼らが、当時偶然にポーランドで任務についていた他の多くのドイツ人男女を証人として引き合いに出しているという事実がその証拠である。しかし、戦後彼らが判で押したように繰り返してきた否認が真っ赤な嘘であったばかりか、彼らが自分のした行為に誇りを持っていたことを、第 101 警察予備隊の男たちがポーランドでの滞在記念に撮った、ほんのわずかしか陽の目を見なかった写真より雄弁に語るものはない。自分たちの行動を殺戮作戦を含めて残らず写真におさめて記録する用意周到さは、彼らが自分たちを今世紀最大の犯罪のひとつの片棒を担いだ人間だとはみなしていなかったことを証明せずにはおかない。これらの写真の中で彼らは、任務を終えて愉しそうに誇らしげなポーズをとって、周囲の雰囲気にすっかり溶けこんでいる。それに続く写真は、ドイツ人がユダヤ人の尊厳を意識的に無視し、それどころかユダヤ人にははなから一切の尊厳を認めず、社会的な死を宣告された者たちを自分たちの欲求を満足させる玩具に使ったことを示している。」

ゴルドハーゲンがここであげているのは、ドイツの警察予備隊員がユダヤの老人のあごひげをつかんでいるところを写した写真である。

「論より証拠ということわざにもあるとおり、映像には言葉を費やす以上の証言力がある。しかし、ごくわずかな言葉が、一枚の写真の語る力を倍加する場合もある。たとえばここでは鼻高々のドイツ人は、多くを語るこの写真の裏にこう書きつけている。『こやつは働かねばならない、だがまず髭をそらんとな。』カメラマンは現場を記録するだけでなく、嘲笑的なコメントまで残しているのだ。ユダヤ人の髭を切りとって辱めるのは当時一般に行われたことだった。この行動には二重の象徴的な意味がこめられている。ひとつにはそれはユダヤ人に対するドイツ人の絶対的な権力を示す。成人した男性であるユダヤ人は、自分の身体が他の人間にほしいままにされ、それも男性のシンボルである髭を切りとられるのをおとなしく我慢しているほかない。しかも個人に対するこの辱めはカメラを前に行われ、犠牲になったユダヤ人の恥辱は永年にわたって記録にとどめられるのである。髭をつかむという単純な行為は、ドイツ人にも、ユダヤ人にも、そして同時代と未来の観察者にも、犠牲

者の髭を切りとる側の圧倒的な優位を見せつけるのである。」（ゴルドハーゲン291ページ以下）

ここはゴルドハーゲンの分析のうち一番いい部分である。彼は、絶対的な権力が表現され、誇示される映像を読みとる目をもっている。国防軍犯罪展を訪れるドイツ人は、まもなくこの視線に気づかずにすむようになるのだ。写真の替わりに彼らが手にするのは、「学問的に精査された、信頼可能なデータと思想」を示す印刷文書である。

この展示に際してレームツマ研究所が提出した基本理念については、「心性（メンタリティー）」という（擬似的な）概念に対する批判も行われるべきであろう。レームツマ自身は最近10年の間に出された二つの異なった論文で、コルテス指揮下のスペイン軍が行ったアステカ族の大量殺戮と、ドイツ軍が行ったユダヤ人殺戮の原因を、彼らが「絶滅戦」を遂行するにあたって示した能力の高さに求めた。ところがこの能力はスペイン人においては彼らのルネサンス的「心性」の発露だとされ、ドイツ人についてもドイツ参謀本部と将校団の「心性」の表れだとされている。

こうした「心性」がいかなる個々の事物から成り立っているのかをこと細かにリストアップするのは実情の解明に役立つかもしれない。ただ、「心性」という概念は、ほかの言葉と同じく暴力の生成についてはごくわずかしか説明できない。ぼくにいわせればこの言葉は分析ではなく、一種のおまじないのようなもので、テニスプレーヤーのボリス・ベッカーが自分の試合結果を「解説」する言葉と変わるところがない。これはスポーツ・レポートに使えば画期的であったかもしれないが、なんら具体的な内容を持ち合わせない。こんな作りものの概念をもっては精神分析や、それが開いた数少ない成功した支店に太刀打ちできるような店を開くのは到底無理だ。ハンブルクの社会研究所は暴力に関する研究をリードする立場にあるが、根本的な欠陥をこんな貧弱な用語で切り抜けようとしている。

〈郵便〉

郵便についてひとこといっておこう。ぼくの家のポストには永年にわたって、『男

たちの妄想』だけでなく『王たちの書』その他についてもたくさんの手紙が舞いこんできた。だがぼくはそれにほとんどまったく返事を書いていない。とても好意的な手紙にもだ。その理由は、それぞれに返事を書くには一人では時間も体力もおよばないから。ぼくには手伝ってくれる秘書もいない。トーマス・M（マン）風のありきたりの返事は、作家業に任せておけばいい。ぼくはこの点に関してはフロイトからデリダまでが頼りにしたテレパシーの威力に期待したい。テレパシーのきまりによれば、葉書なり手紙なりの送り主は、それが宛先にどうやって届いたかまで「わかる」そうだ。同じように、本の著者は自分の本が読者のもとにどう届いたかを「知る」ことができる。あとのことはわからずともよい。そういうことだから、ぼくに手紙を書いてくれても一向にかまわない。返事が来ることをおそれなくてもいい、せいぜい本が送られてくるくらいだろう。

クラウス・テーヴェライト
フライブルク、2000 年初夏